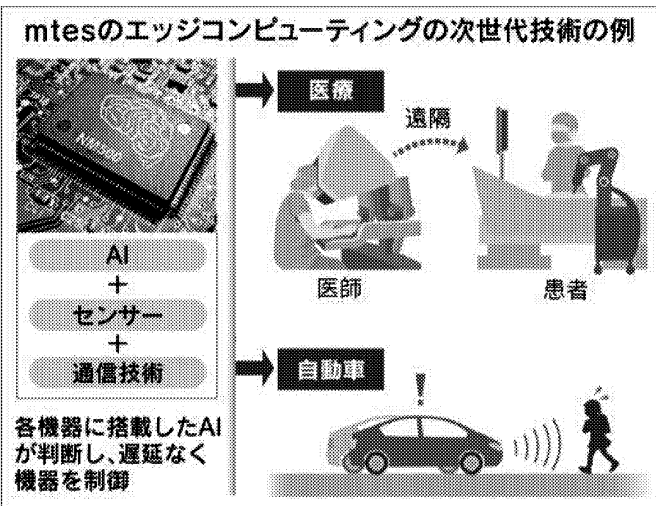


## 機器がデータ処理「エッジ技術」

あらゆるモノがネットにつながるIoT関連機器を開発するmtes（東京・品川、原田隆朗社長）は、米ジェネラル・ビジョンとデータをモノの近くで処理するエッジコンピューティング技術を共同開発する。ジェネラルが持つAI（人工知能）チップと、mtesのIoTと通信技術を組み合わせる。2020年をメドに自動運転や遠隔医療向けの機器の開発を目指す。

技術開発に向け、mtesとジェネラルは、16日に共同出資会社「ロボセンシング」を設立する。資本金は約5億円で、m

## AIカメラ、車・医療に活用



mtesが65%、ジェネラルが25%、残り10%は一般の投資家が出資する。新会社は、カメラや各種センサーとAIを組み合わせたエッジコンピューターを、AIカメラにはジェ

ネラルのチップを使うた。人感センサーを搭載したAIカメラが人などが通った際に自動で映像を記録。事前に不審者などのデータを登録しておけば、AIが自動で判断して必要な時だけデータを送る。さらに街路灯同士でデータをやり取りし、不審者の行動を自動で追尾することもできる。

医療分野に活用すれば、遠隔手術などの精度を高められる。医療器具側にAIチップを組み込めば、医師が手術器具をより正確に扱えるようになる。手術精度を高めながら時間の短縮にもつながる。手術精度を高めながら時間の短縮にもつながる。手術精度を高めながら時間の短縮にもつながる。

ジェネラルは米IBMの技術者が設立したスタートアップ企業で、エッジコンピューティングに欠かせないAIチップの開発を手がける。半導体世界大手の米インテルも供与するなど高い技術を持つ。

mtesは10月に第一弾として、AIカメラを開発を手がける。半導体世界大手の米インテルも供与するなど高い技術を持つ。